



藤沢久美

# 誰がための投信

16

ふじさわ・くみ…シンクタンクソフィアバンク副代表。国内外の投資運用会社勤務を経て、1996年に日本初の投資信託評価会社を起業。99年同社を世界的格付け会社に売却後、2000年にシンクタンク・ソフィアバンクの設立に参画。現在、副代表。03年社会起業家フォーラム設立、副代表。07年「ヤング・グローバル・リーダー」に選出。法政大学大学院客員教授、金融審議会委員など公職も多数兼務。著書は『なぜ、御用聞きビジネスが伸びているのか』『投資信託主義など多数。

2009年モーニングスター・アワード・ファンド・オブ・ザ・イヤーが発表された。今年で11回目となる。10年を超えて、この表彰が続いてきたことに深い感慨を覚える。

私が投資信託評価に取り組み始めたのが14年前。当時は、投資信託の運用評価をしようにも、10年以上運用実績のあるファンドは、ほんの数本しかなく、3年以上の運用実績のあるものすら、決して多くはなかった。少なくとも評価をするには、5年の運用実績が欲しいと思ったものの、それが叶わず、最低3年間の運用実績があれば、評価対象とするとした。数年後に、モーニングスターが日本で投信評価を始め、ファンド・オブ・ザ・イヤーの発表を始めた。そして11回目を迎えた今、改めて思うのは投資信託業界は、少しずつは進化しているのだろうかということだ。

当時からの業界に身を置く人たちが

## ファンドオブザイヤーに思う 着実に進化する投信業界

と話をする、投信業界は変わらな  
いという結論になりがちだ。私自身  
も、その思いがないわけではない。

銀行による窓販に期待を寄せ、ポートフォリオ型の資産運用や長期投資が主流になることを願ったが、実際に起こったことは、かつて証券会社が経験したことと同じ、相場に応じてファンドを販売し、投資家に大きな痛手を与えるといういつか来た道が、リーマン・ショック以降、まさに起きている。

しかし、ファンド・オブ・ザ・イヤーの発表を見た時、投資信託業界は少なからず進化はしていると思ったのだ。長期の運用実績を持つファンドも増え、繰り返し受賞しているファンドもある。信頼に値するファンドが存在している証拠だ。10年を経て、ようやく見えて来るものがあることを思い、長期投資の大切さを改めて教えてもらった気がする。